

新宮山彦ぐるーぶ 第1780回

深仙宿避難小屋の入り口扉取替作業、伊富喜行者追悼慰霊他

◇実施日 平成26年09月27日(土)

◇参加者 沖崎吉信、川島 功、濱野兼吉、畑林秀味、大江加予子

松本吉殖、中川治平、坂口秩臣、榎本眞仁

梶野照雄(小屋で待機・手伝)

計10名

深仙宿避難小屋を利用した人からの、「扉の不備やすきま風で寒かった」という声を聞きつけた松本吉殖さんが、自主的に入り口扉を製作して取り替えてくださるということで、その支援と、伊富喜行者の慰霊を兼ねて、今回の行事と相成った。

新宮隊は午前6時半出発、私は大淀を7時過ぎに出発し、旭の登山口にはほぼ同刻(8時50分)に到着。さっそく荷造りを行う。

主な荷物は、半分ずつに仕上げた入り口扉と、明かり取り用のポリカ波板、作業用の脚立、扉を連結する板金、道具類などである。

9時5分出発。川島さんが扉の下半分、私が扉の上半分とポリカ波板を背負った。重量的にはさほどきつくないが、大きさが大変



やっかいで、狭い場所は通過できず、頭上の枝に引っかかれば押し戻される。中川さんが枝の位置を教えてください、それを、屈んだり捲いたりしてやり過ぎした。

もっとも苦戦したのは風である。岩頭で突風にあおられ、肝を冷やすこともしばしば。強烈な向かい風を受けたときには、昔のテレビ番組に出ていた「白影さん」になりそうだった。



り般若心経を唱えた。伊富喜行者は、平成7年に深仙で60日の断食行に挑まれた。新宮山彦ぐるーぶとしても行のサポートに当たったが、55日目にあたる9月18日に入定された。

11時48分、深仙の宿着。まずは昼食をとる。食後には大江さんがコーヒーとロールケーキを振

何カ所かでの休憩を挟みながら、11時5分、千丈平。9月22日に登山口から約30分の地点で行方不明になった方がおられ、霧の向こう側からへの爆音と呼びかけの放送音が聞こえる。捜索のチラシを見ると、濱中道子さんという方で、二人で登り始めて、一つ目のピークで二手に別れた後、行方がわからなくなつたとある。



11時半に伊富喜さんの慰霊碑に到着。お供えをし、中川さんの導師によ



る舞ってくださり、美味しくいただいた。小屋で待機して下さっていた梶野さんは、タブレットで倒木処理作業動画などを見せてくださった。

12時半から作業開始。松本さんが中心となって、古い扉を取り外し、新しい扉をまず連結組み立てし、入り口に取り付ける作業が行われた。間口よりも大きく設計された扉は、風や雪の吹き込みを防いでくれることであろう。

最後に内外に施錠金具を取り付けて、立派な扉が完成。電動ドライバや工具類を巧みに操る、実に見事な職人作業であった。

松本さんは、軒の隙間も板金で塞いでくださった。垂木の間隔が

微妙に違うので、寸法を測りながらの仕上げ作業。坂口さんがサポートし、これまた素晴らしい仕上がり。雪の吹き込みもうんと少なくなるだろう。

一方、北側の壁上部のトタン板を透明ポリカに交換する作業は、川島さんを中心におこなれた。持参した脚立では高さが足りず、沖崎さんがお堂から台を担ぎ出したがそれでも届かず、またさらに別の台を用意するなどして、何とか作業にこぎつけた。

外したトタン板をあてがい、透明ポリカに型どりをし、松本さんのスーパークルがスイスイと切り整えていく。

トタン板と透明ポリカのピッチが合わず、打ち付けに苦労しながらも、無事、明かり取りが完成した。

2時。すべての作業が終わり、荷物を片付け、小屋の前で記念写真を撮った。2時10分、深仙発。釈迦へは寄らず、トリカブトの咲く千丈平へ引き返した。背中の戸板がなくなっておかげで、大変歩きやすくなった。終盤になって気がつ



いたのだが、沖崎さんは道具類を背負ってくださいだったのであろう。下山時の荷物も重たかったに違いない。また、駐車場に近い登山道にあるアルミ製のはしご2基は梶野さんが設置されたものだということであった。まさに縁の下の力持ちである。

登山口到着は4時20分。川島代表からねぎらいの言葉をいただき、それぞれの帰路の安全を祈って解散した。お疲れ様でした。

榊本記



追記

伊富喜行者が亡くなった平成7年の記録（一部、伊富喜行者とは関係のないものもあります）をいくつか紹介します。私的な記録に若干の加筆をしたものゆえ、誤記や思い違いがあるかもしれませんが、ご容赦ください。

◎五月二十一日（日）

深仙の宿灌頂堂修復の落慶法要。池原を朝三時出発。前鬼の車止めは鍵が開いておらず、林道を歩く。

五時十五分。京都聖護院一行と共に小仲坊を出発。

深仙の宿に三井寺、青岸渡寺、新宮山彦など百五十人ほどが集まり、雨の中、盛大に法要が営まれた。避難小屋では焚き火のあまりの煙たさにみんなで涙した。山伏の問答を直に見るのは初めてで、興味深かった。

◎五月二十八日（日）

亥年を記念して新宮山彦ぐるーぷの亥ヶ谷山登山（尾鷲）。尾鷲山岳会に松阪山岳会も加わって盛大な親睦会となった。

帰りには、尾鷲山岳会で参加していた人が迷子になっていることが発覚し、急遽捜索するというハプニングがあった。

◎七月八日（土）

前鬼から入山し釈迦、孔雀、仏生、明星と歩く。いっそ弥山までと思ったが、天気が崩れ、日没も近づいてきたので、明星ヶ岳の肩でピクニックする。翌朝気がつくくと、周囲にオオヤマレンゲの花が咲いていた。

九日は弥山まで歩き、一本六百五十円の山小屋缶ビールを飲んで前

鬼へ戻った。

深仙の宿では、確か、落慶法要の時にも来られていた方がお堂の掃除をされていた。まもなく修行に入るるのでその準備をしているのだとおっしゃる。後々深く関わることになるその人は、滋賀県立志神社の宮司である伊富喜秀夫さん（五十歳）であった。

伊富喜さんは、滋賀県甲西町（現・湖南市）の立志（りゆうし）神社の宮司であったが、近年の宗教界の墮落を憂い、修行を積んで自らの霊力を高めたいと、無双洞で40日の断食行を果たすなどし、今回深仙で60日の断食行に挑まれたのである。

◎八月十四日（月）

十津川村滝川から赤井谷を経て深仙の宿へ登る。赤井谷は素晴らしかった。断食修行中の伊富喜さんはちょうど二十日目。まったく元気そうで、大日岳で修行をされていた。新宮からビデオ撮影の矢浜さん、生熊さん夫妻、山上さんがサポートに来られていた。

◎九月三日（日）

深仙の宿で修行中の伊富喜さんが四十日目を迎え、釈迦ヶ岳山頂にて行をする。新宮山彦もサポートにあたる。私は赤井谷から入山。記録的な日照り続きで、山もずいぶん枯れていたのに、この日は朝から嵐であった。山頂での行の後、深仙のお堂で四十分ほど護摩を焚き、行が営まれた。

◎九月十日（日）

深仙の宿にて三井寺、立志神社、新宮山彦が集合。伊富喜さんの様子を伺い、今後の相談をする。

今回は前鬼より入山したが、途中では下山してくる新宮の友人玉岡明君に十年ぶりの再会。昨夜の満月を眺めに登ったと言う。

太古の辻を過ぎてから、一人のおじいさんに出会った。弥山から縦走してきたと言う。水を求められたので水筒一つ分を分けてあげた。

午後、嫁越し峠まで足を伸ばしてから、ぼちぼちと太古の辻を下っていた。何か胸騒ぎがして仕方なかったのだが、熊の水の次の沢が気になって下りてみたら、今朝のおじいさんが半ば倒れるように腰を下ろしている。一瞬ぎくりとしたが、息があった。朝あげた水は飲み尽くし、疲労困憊状態である。押したり引いたりして登山道まで連れ出し、肩を貸して小仲坊まで下ろした。すっかり日が暮れてしまった。

池原まで行って民宿を探そう促したが、もう歩くのは嫌だと、頑として動かず、小仲坊での宿泊を決め込んだ。

しかし、このところ前鬼の林道には、置き去りにされた大型のハスキー犬二頭が棲みつき、車にすら飛びかかってくる状態であった。おじいさんが一人で歩くのは非常に危険なので、翌日、年休を取り、早朝から迎えに入った。おじいさんは、折しも宿を立つところで、林道ゲートまで同行し、有無を言わず車に押し込んだ。

ハスキー犬は案の上の凶暴さをさらけ出していた。それを見たおじいさんは、これではとても一人では歩けなかったと、顔面蒼白であった。前鬼口のバス停で定期バスの時刻を確認し、職場へ戻った。

◎九月十五日（金）

伊富喜さんの修行も五十日を超えたので、体調の心配も深まる。

前鬼から入山。小仲坊では知り合いの六人が車で枋の実拾いに来ていた。そうと知っていたれば一緒にゲートを通らせてもらったのに……。しばらく歓談していたが、試しに背負ったリュックの重さに呆れていた。カメラ、食料、衣類、その他装備に加えて命の水を四・五リットル。伊富喜さんへの手土産は、いつも水だけである。

太古の辻で、先行者三人に追いついた。一人は見覚えがある。昨年九月に大普賢でお会いした大阪の森脇さんである。あのとき水を一・

五リットル分けてあげたことを大変喜んで下さった。森脇さんは新宮山彦関西支部の支部長で、同行の二人も関西支部員の平田さんと堂田さんとのこと。

三人を追い越して、一足先に深仙の宿に着く。

伊富喜さんはかなり衰弱している。五十日を過ぎてから加速度的な衰弱ぶりである。避難小屋で森脇さんらと相談し、断食行の中止を勧めることにしたが、本人はまったく受け入れない。翌日奥さんや立志神社の方々が入山する予定だったので、森脇さんと共に下山する。平田さんと堂田さんは弥山を目指して縦走して行った。

◎九月十七日（日）

六時半出発。新穂高温泉へ。リフレッシュ休暇がとれたので、念願の北アルプスを歩いた。

十八日は朝から槍ヶ岳まで登り、山小舎に宿泊。山頂では大峰方向へ向かって、伊富喜さんの無事を祈った。

◎九月二十四日（日）

台風が近づいていた。このところ伊富喜さんのことで山に入ると、たいいてい雨である。

私が北アルプス縦走中の十八日に、伊富喜さんが亡くなられた。ものの記録によると、伊富喜さんは、7リットルの水タンクを入れたりユックを背負い、お堂の中で倒れた状態で発見され、担架で下山中に亡くなった。一時は意識を取り戻し、心配する支援者らに「今夜は一杯やりましょう」と話し、駆けつけた夫人と末娘にも満面の笑みを見せたという。……

疲労感の残る体で旭から入山。森脇さんらは前日から入山していた。深仙の宿の片づけである。こんな雨の日でも他に六人の登山者がいた。伊富喜さんが、断食行の初期に過ごされていた三重の窟のテントを

撤収する。お堂の中も片付けたが、玉岡さんら新宮部隊が来ないと荷物整理がつかない。結局、新宮勢は台風接近のため入山を中止したのであった。仕方なく大切な法螺貝だけウレタンマットでくるんで森脇さんが担いだ。

◎十月八日（日）

八、十日の連休中に、新宮山彦ぐるーぷで孔雀岳周辺の倒木除去作業をすることになった。最近遭難事故が多いので、登山道を整備しようということである。残念ながら九日は出張、十日は郡バレーボール新人大会があつて参加できないので、八日の荷上げ作業だけ手伝う。昼過ぎ、前鬼からチェンソー用のガソリンとオイルを背負い上げた。下山したときにはすっかり暗くなっていた。

◎十月十五日（日）

深仙の宿にて伊富喜さんの合同慰霊祭。本人は志を貫いたわけだが、奥さんやお子さんを見ていると辛いものがあった。

その後、佐々木正俊氏を会長として伊富喜行者を偲ぶ「秀明会」が設立され、毎年慰霊登山を行っていたが、十三回を区切りに解散した。

以後、個人的に九月の深仙参りを続けている。



2007年9月9日、13回忌



2010年9月12日、玉岡さんと